

新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（中編）

首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009

Prime Minister Taro Aso in Newspaper Comic Strips (Part 2): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2008-2009

水野 剛也・福田 朋実
Takeya Mizuno, Tomomi Fukuda,
木野村樹里・志賀 俊之
Juri Kinomura, Toshiyuki Shiga,
菅原 想・千田 一輝
Omoi Sugawara, Kazuki Chida

はじめに 前編の要約と中編のねらい

本論文は、麻生太郎首相の在任期間中（2008年9月24日～2009年9月16日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌前号（第48巻・第2号、2011年3月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

本号に掲載する中編からいよいよ本題に入り、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を質的に分析する。

本誌次号（第49巻・第2号）に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析した上で、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く麻生首相

本項では、麻生首相を描いた作品を漫画ごとに質的に分析する。

・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』(朝刊)

『毎日新聞』の朝刊で連載されている「アサッテ君」(東海林さだお)は、平凡な会社員の朝手春男とその家族の庶民的な日常生活を、ときに時事問題にからめて描く漫画である。朝手家は6人家族で、主人公・春男、妻・秋子、小学生の長男・夏夫、幼稚園児の長女・冬美、春男の両親・昼吉と夕子、からなる。作品の舞台となるのは主に彼らの家庭や職場である。連載を開始したのは1974年6月で、2003年11月に1万回を達成し、本論文執筆時点(2011年9月)でも1万2,600回を超えて継続中である。¹¹

「モテない、カネない、度胸もない」主人公とは対照的に、作者の東海林さだお(本名・庄司禎雄)は長年にわたりめざましい活躍をつづけている漫画家である。1937年に東京都杉並区でうまれた東海林は、早稲田大学入学後から本格的に漫画を描きはじめ、大学を中退後、1967年に実質的なデビュー作である「新漫画文学全集」(『週刊漫画TIMES』)の連載を手がけた。その他の代表作として、「タンマ君」(『週刊文春』)、「サラリーマン専科」(『週刊現代』)、「ショージ君」(『週刊漫画サンデー』)などがあり、食べ物に関するコラム「あれも食いたい これも食いたい」(『週刊朝日』)でも有名である。受賞(章)歴も多彩で、第16回文藝春秋漫画賞(1970年)、第11回講談社エッセイ賞(1995年)、第45回菊地寛賞(1997年)、紫綬褒章(2000年)、旭日小綬章(2011年)、などがある。2001年には「アサッテ君」で第30回日本漫画家協会賞大賞を受賞している。¹²

小泉政権以降、「アサッテ君」は毎年、一定数の作品で必ず現役の首相を取りあげてきたが、その特徴は麻生政権時も継続して見られた。「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊、288本中14本=4.86%)には及ばないものの、335本中8本(2.38%、小数点以下3桁切り捨て)の作品で麻生を描いている。安倍・福田につづき1年弱という短い期間で首相が交代したにもかかわらず、安定した頻度・本数で描いており、先行研究(本論文前編・後注4参照)が「時事的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分に首肯できる。なお、小泉から麻生までの4人の首相全員を複数の作品で描いているのは、3大紙の4コマ漫画のなかでは「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だけである。いずれの首相についても、「アサッテ君」の本数・頻度は「地球防衛家のヒトビト」について多い。さらに、この2つの漫画は首相に就任する以前から麻生を批判的な文脈で描いている。この点はあらためて後述する。また、同じ時事漫画でも、先行研究は「アサッテ君」を「世論反映型」、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」と区別して特徴づけているが、この点についても後述する。¹³

前任者3人と比較すると、麻生は「アサッテ君」において相対的に「描かれやすい」首相であった。在任期間が異なるため頻度を比べると、小泉は0.87%(1,825本中16本)、安倍は2.37%(337本中8本)、福田は0.59%(335本中2本)で描かれており、麻生の2.38%は安倍をごくわずかではあるが上回り最高値である。後述するように、高級ホテルのバー通いや漢字の読み間違いなど、社会の耳

目を集める言動が多かったことが、麻生を「描かれやすい」首相にした一因だと考えられる。

次に、麻生を描いた作品の質的な分析に移るが、そこで参考になるのは、とくに安倍・福田の作品を分析した先行研究である。そこで示されている類型化モデルは小泉の先行研究を微調整したもので、「アサッテ君」の首相描写をまず政治的な批評性・風刺性の濃淡により2パターンにわけ、両パターンをさらに現実の言動・フィクションという2つの要素により細分化する、というものである。

より具体的には、「アサッテ君」の首相描写は以下の4パターンに大別できる。

- 1 批評・風刺性薄い+現実 現実にあった首相の言動や政治問題に関連させて首相を登場させるが、最終的には家庭内の些事など首相や政治問題とは関係の薄いオチやシャレに帰結させる。
- 2 批評・風刺性薄い+フィクション パターン1と同じく政治とは関係の薄いオチやシャレにつなげるために首相を登場させるが、そこで示される首相の言動や政治問題は現実のものでなく、作者がつくりだしたフィクションである。
- 3 批評・風刺性濃い+現実 現実にあった首相の言動や政治問題に関連させて首相を登場させ、かつ主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせる。
- 4 批評・風刺性濃い+フィクション パターン3と同じく主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせるが、そこで示される首相の言動や政治問題は現実のものでなく、作者がつくりだしたフィクションである。

これらのパターンは、麻生を描いた作品にも十分に当てはまる。以下では、この4類型にそって分析をすすめる。ただし、各パターンは互いに完全に排他的でなく、1つの作品に複数のパターンが混在する場合や、どのパターンに分類すべきか明確に判断しにくい場合もあることを断っておく。

まず、本論文が真っ先に着目すべき点は、先行研究では「アサッテ君」が「もっとも得意とするパターン」と位置づけられていた、批評性・風刺性の薄い作品が少なかったことである。麻生を描いた8本のうち、政治問題と関係が薄いオチやシャレにつなげる作品は2本しかなかった。いずれもパターン1（批評・風刺性薄い+現実）に該当する。

その1つ、2009年6月20日号（No.11911）の作品（図1）は、次のような内容である。

- ・「余命1ヶ月の麻生首相」と伝える雑誌記事を読みながら、春男が「余命1ヶ月か…」と独り言をいう（1～2コマ）
- ・財布から1万円札を取りだし、寂しげに「こっちの余命は10日だな」とつぶやく（3～4コマ）

「余命1ヶ月の麻生首相」（1コマ）は、『週刊文春』（2009年6月25日号）の特集記事の見出しの一部と同一であり、この部分は現実にもとづいている。この見出しを描くこと自体が、政治的影響力を失いつつある首相を批評・風刺していると取れなくもない。しかし、主人公である春男自身が政治的

アサツテ君
東海林さだお

(11911)



図1 2009年6月20日号 (No.11911)

アサツテ君
東海林さだお

(11693)



図2 2008年11月7日号 (No.11693)

な発言をしているわけではなく、オチも庶民のありふれた金銭問題に帰結しているため、パターン1に分類できる。このように批評性・風刺性が希薄でたわいのない作風は、これまで「アサツテ君」が「もっとも得意とするパターン」であった。しかし、麻生政権時にはむしろ少数派に転じている。¹⁴

パターン1に該当するもう1本は2008年11月7日号 (No.11693) の作品 (図2) であるが、ここで留意すべきは、最終的には非政治的なオチに収束しているためパターン1に分類してはいるもの

の、同時にパターン3（批評・風刺性濃い+現実）の要素を含んでいるともとれる点である。以下に示すように、実際にあった首相の言動を登場人物が率直に批評しているからである。

- ・「毎晩ホテルのバーなんて」「いい身分だよな」と首相をねたまながら、春男が居酒屋で同僚と焼き鳥を食べている（1コマ）
- ・居酒屋の主人が、「大衆酒場」の名称を「ホテル酒場」に変更すれば、首相と同じく2人も「ホテル」で飲食したことになる、と冗談をいう（2～4コマ）

この作品では、首相は2コマ目以降の非政治的でたわいのないオチにつなげるためのきっかけとして登場するにすぎない。そのため、パターン1（批評・風刺性薄い+現実）に含めるのが妥当である。しかし、冒頭（1コマ）で春男が同僚と首相のバー通いをやかんでいる点に着目すれば、批評・風刺を特徴とするパターン3（批評・風刺性濃い+現実）の要素を含んでいるといえなくもない。就任直後より、首相は高級ホテルのバーに頻繁に立ちよることを批判され、にもかかわらずバー通いをやめようとしなかったことで、さらなる反感を招いていた。この作品が象徴するように、麻生政権時の「アサッテ君」の首相描写で特徴的なのは、これまで得意としてきた、批評性・風刺性が薄くたわいのない作風が影を潜めていることである。

他方、8本のうち実に6本は、明らかに批評・風刺する文脈で麻生を描いていた。現実にあった言動や政治問題を扱うパターン3（批評・風刺性濃い+現実）が3本、フィクショナルな設定をするパターン4（批評・風刺性濃い+フィクション）が2本あり、そのいずれかが判然としないが批評性・風刺性は十分に認められる作品が1本あった。

まず、パターン3の典型例の1つが、2008年11月16日号（No.11701）の作品（図3）である。漢字を正確に読めない首相について春男と秋子が、「おバカタレント」のように「笑いをとろうとしてわざとといったんじゃないの」（1～2コマ）、「そうだといいんだけどねえ」（4コマ）と困った様子で話している。首相のたびかさなる漢字の読み間違いは実際にあったことで、その問題をかかなり率直、かつ否定的に皮肉っている。

図3を含め、漢字の誤読は少なくとも3本（いずれもパターン3）の作品で題材とされており、これは麻生政権時の「アサッテ君」に批評性・風刺性の濃い作品が目立つ理由を説明づける要因として有力である。もう一例をあげると、2008年11月27日号（No.11712）の作品（図4）では、新聞の「首相日々」欄を読む春男が、「きょうは読み間違いなし」と「ひと言つけ加えてほしいな」（3～4コマ）と皮肉をいっている。頻発する首相の失敗を揶揄していることは明白である。また、本論文が定義する「首相を描いている作品」には該当しないものの、明らかに漢字の読み間違いをからかっている作品は他にも複数あった。このことから、誤読問題が「アサッテ君」の首相描写に批評性・風刺性を付加したと考えられる。¹⁵

次に、作者が創作した架空の設定で首相を批判的に描くパターン4（批評・風刺性濃い+フィク

・クイズ番組の司会者らしき男性が、居酒屋のメニューの値段を首相に尋ねる（3～4コマ）

アサッテ君

東海林さだお

この作品は、高級ホテルのバーに通ってばかりで庶民感覚がないと批判される首相を風刺しているが（漢字の読み間違いを揶揄している可能性もある）、居酒屋のメニューを前に思案する首相は架空の姿であるため、パターン4に分類できる。

高級バーの常連である首相と質素な一般庶民との落差は図2でも描かれており、このテーマも「アサッテ君」の作風の変化を理解する上で注目に値する。「アサッテ君」をはじめ新聞4コマ漫画で舞台となるのは、ごく普通の市民の日常生活である。最高権力者の豪華な生活ぶりは庶民の羨ましい暮らしぶりとは好対照をなすため、とくに首相を皮肉る題材として取りあげられやすかったと考えられる。バー通いと漢字の誤読は「地球防衛家のヒトビト」でも複数の作品で取りあげられていることから、時事漫画が首相を批評・風刺する題材として適していたと考えられる。¹⁶

同じくパターン4として、アメリカのパラク・オバマ大統領と対比して首相を描いた2009年2月8日号（No.11783）の作品（図6）がある。同年1月に就任したばかりの大統領の演説集が売れゆき好調なのに対して、もし麻生の演説集が出版されたら「売れるかな？」（3コマ）と春男と秋子が苦笑している。演説の巧みさを高く評価され、実際に演説集まで出版されているオバマと対比させることで、みずからの発言で批判されることの多い首相を揶揄している。漢字の読み間違いを暗にからかっていると読めなくもない。しかしいずれにせよ、フィクショナルな状況（首相の演説集は実際には出版されていない）を設定して、そこで大統領ほど人気のない首相を批評・風刺していることは間違いない。同時期（2009年1月）の麻生内閣の支持率は19%（朝日新聞社の世論調査、本論文前編・表5参照）で、就任以来最低を記録していた。なお、他の政治家と対比・並列して首相を描く手法は「地球防衛家のヒトビト」でよく採用される描き方であるが、「アサッテ君」ではめずらしい。この点も、麻生政権時の「アサッテ君」に批評性・風刺性の濃い作品が目立つこととあわせて理解しておく必要がある。

(11705)



図5 2008年11月20日号（No.11705）

アサッテ君

東海林さだお

(11783)



図6 2009年2月8日号 (No.11783)

追加的に、フィクショナルな状況を設定して首相を滑稽に描く手法は1コマの政治風刺漫画でよく見られるパターンであり、先行研究も指摘しているように、そこに1コマと4コマ漫画との類似性を見いだすことができる。「アサッテ君」ではパターン4の図5・6がそれに該当し、「地球防衛家のヒトビト」では同様の手法を用いている作品がさらに多く見られる。本論文の後編(本誌次号掲載予定)であらためて言及するが、首相をはじめ政治家を批評・風刺する場合には、新聞4コマ漫画と1コマ漫画は類似した性質を有することがあるようである。

最後に、首相を批評・風刺していることは確実であるが、現実の言動を描いているのか、フィクションとして描いているのか判別しかねる作品が1本あったので、紹介しておく。2009年7月7日号(No.11928)の作品(図7)がそれである。全国チェーンの飲食店などで形式的に「管理職」にさせられ、過酷な労働を強いられる「名ばかり店長」が問題になっていることになぞらえ、春男と同僚が「名ばかり首相ってのもあるんだ」「牛井屋の店長なみだ」(4コマ)と揶揄する、という内容である。このとき、麻生内閣の支持率は低迷したままで、その2日前の静岡県知事選(7月5日)では民主党系の立候補者が当選するなど、とくに衆議院の解散・総選挙をめぐる首相の指導力を疑問視する声が強まっていた。首相が党首を務める自民党内にも、公然と退陣を求める議員がいた。しかし、具体的に何をさして「名ばかり首相」とよんでいるのか不明であるため、明確に分類できない。もっとも、本論文にとって重要なのは、パターンわけすることそれ自体よりも、他の作品と同じくここでも登場人物が率直に首相を批判していることである。

これまでの分析から、麻生政権時の「アサッテ君」による首相描写のもっとも顕著な特徴として、それ以前と比べ批評性・風刺性に富む作品が目立っているこ

アサッテ君
東海林さだお

(11928)

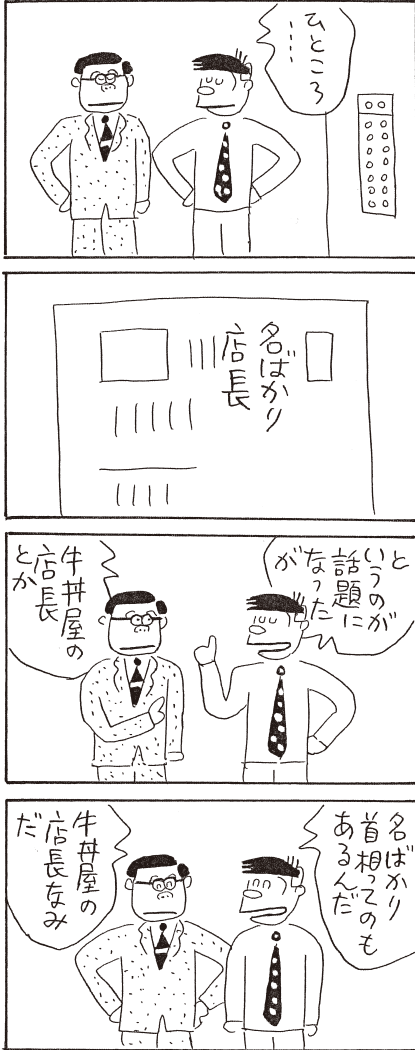


図7 2009年7月7日号 (No.11928)

アサッテ君
東海林さだお

(11642)

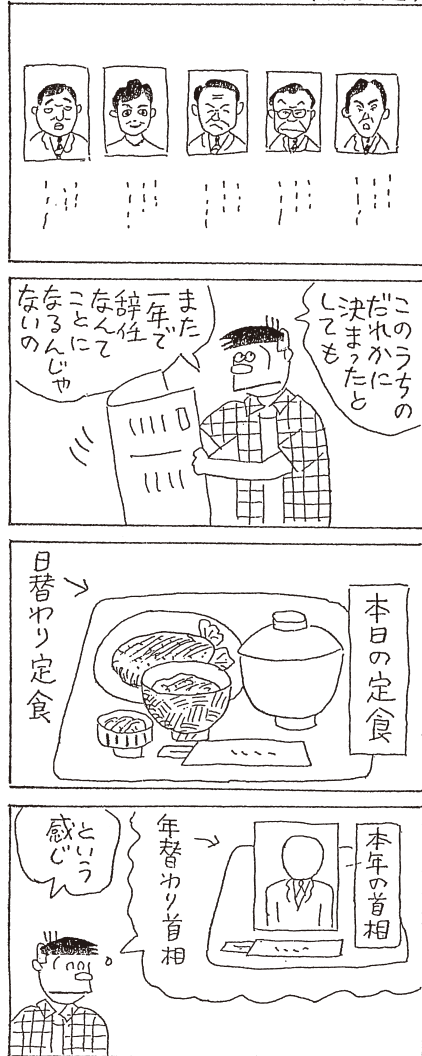


図8 2008年9月15日号 (No.11642)

とがわかった。実のところ、この傾向は先行研究でも指摘されている。つまり、5年5ヵ月にわたる長期政権を築いた小泉純一郎と比較して、連続して約1年で政権を「投げ出した」安倍晋三・福田康夫はより批判的な文脈で描かれることが多かった。その特徴は麻生政権時にさらに強まり、批評性・風刺性の薄いオチやシャレにまとめる作品はむしろ少数派に転じてしまった。

上述の論点を補強する重要な材料として、首相に就任する以前から「アサッテ君」が麻生を批判的

に描いていた事実を指摘しておく。2008年9月15日号 (No.11642) の作品 (図8) がそれで、麻生は自民党総裁選の立候補者の1人、つまり実質的に次の首相になる可能性が高い政治家として描かれている。本論文の定義に合致する描かれ方で就任以前の麻生が登場する作品はこの1本だけであるが、本論文にとって重要なのは、春男が冷やかな態度で麻生を含む立候補者を論評していることである。そのなかで春男は、「このうちのだれかに決まったとしても」「また一年で辞任なんてことになるんじゃないの」(2コマ)とのべ、さらに「日替わり定食」(3コマ)になぞらえ「年替わり首相」「という感じ」(4コマ)と揶揄している。

つまり、安倍・福田がつづけて短期間で離職したことで、その後継者(麻生)に対しても、就任以前からすでに批判的に描く土壌、でなければ懐疑的に見る態度がある程度は醸成されていたと考えられるのである。しかも、「また一年で辞任」(2コマ)という春男の予想的中し、この作品からちょうど1年後の2009年9月16日(首相就任は2008年9月24日)、麻生は実際に首相の地位を失ってしまった。文字どおりの「年替わり首相」(4コマ)になってしまったわけであり、この点にかんがみれば、麻生を描いた作品に批評性・風刺性が目立つことは、麻生の「描かれやすさ」とともに、就任以前の安倍・福田政権時までさかのぼる地つづきの特徴として、連続的な流れのなかで把握する必要がある。なお、安倍・福田も就任する以前から「アサッテ君」で描かれているが、どの作品もたわいのないオチやシャレに帰結させる内容で、批評性・風刺性は見られない。¹⁷

もちろん、「アサッテ君」が「世論反映型」の「時事的4コマ漫画」である点も、麻生政権時に批評性・風刺性の濃い作品が目立ったことを説明づける本質的な理由として看過できない。先行研究も指摘しているように、「アサッテ君」は「社会で話題となっている事象を積極的に取りあげている」という意味で時事性が強く、世相を敏感に反映する。それゆえに、「世論と連動して首相の描き方に相当な柔軟性・可変性がある」と考えられるのである。麻生の場合、高級ホテルのバー通いや頻発する漢字の誤読が広く国民の反感・失笑を買っていた。そうした否定的な社会的評価と連動して、「アサッテ君」の首相描写にも批評性・風刺性が強まったと考えられる。麻生を描いた作品の本数・頻度が他の首相のそれを上回った、つまり「描かれやすい」首相であったことも、同じように説明できる。首相を揶揄する登場人物たちは、麻生に対する一般市民の感情を代弁していたのかもしれない。

しかし、「世論反映型」であることが、「アサッテ君」の首相描写の類型化をやや困難にしていることも事実である。麻生を描いた8本の作品の多くは本論文が提示した4パターンで十分に分類できたが、2つのパターンの特徴を含む作品が1本(図2)、どのパターンに入れるべきか判断しかねる作品も1本(図7)あった。本論文の後編で指摘するが、同じ時事的4コマ漫画でも「自己主張型」の「地球防衛家のヒトビト」では、1本の作品に複数の表現パターンが混在している場合が多い。首相に対する批評性・風刺性が目立つ点も含め、麻生の在任期間中の「アサッテ君」は「地球防衛家のヒトビト」にやや近づいていたともいえる。いずれにせよ、世論と連関した柔軟性・可変性を特徴とするがゆえに、「アサッテ君」の首相描写のモデル化は依然として不確定な要素をともっており、さらなる事例研究を積みかさねることでより精緻化していく必要がある。

表7 「アサッテ君」のシンボル使用（首相別）

| | 画像のみ | 文字のみ | 画像と文字（併用） |
|----|------|------|-----------|
| 小泉 | 6本 | 9本 | 1本 |
| 安倍 | 4本 | 3本 | 1本 |
| 福田 | 1本 | 1本 | 0本 |
| 麻生 | 3本 | 2本 | 3本 |
| 合計 | 14本 | 15本 | 5本 |

麻生を示すシンボルでは、画像のみ＝3本、文字のみ＝2本、併用＝3本、と大きな偏りは見られない。過去の首相と比較してまとめた表7を見ても、麻生だけに突出して目立つような特徴は見いだせない。「アサッテ君」において、小泉以降の首相のなかで麻生は「もっとも描かれやすい」首相であるが、必ずしも「画像として描きやすい」というわけではないのかもしれない。本論文の後編で分析する「地球防衛家のヒトビト」でも、使用されるシンボルで大きな偏りは見られない。しかし、本論文の前編で指摘したように、シンボル使用については依然として不明な点が多い。継続的に研究することで新たな知見を追究する価値は十分にある。

最後に、先行研究に引きつづき本論文でも、新聞や雑誌などマス・メディアの報道を媒介して首相を描く手法が少なくとも2本で見られた点は見過ごせない。図1は雑誌、図4では新聞の報道に接した上で登場人物は首相について語っている。見方によっては図3も、新聞の報道を通して漢字を誤読する首相を描いていると読むことが可能である。ただし、麻生はテレビ画面のなかに描かれることはなかった。前任者の場合、小泉を描いた16本では新聞7本とテレビ1本、安倍を描いた8本では新聞3本とテレビ1本、福田を描いた2本ではテレビ1本、であった。なお、マス・メディアの報道を媒介するという特徴は後述する「ウチの場合は」（『毎日新聞』夕刊）、そして本論文の後編で分析する「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）にも共通して見られる新聞4コマ漫画の独自性であり、折に触れて指摘する。

・ウチの場合は（森下裕美）『毎日新聞』（夕刊）

『毎日新聞』の夕刊で連載されている「ウチの場合は」（森下裕美）は、主人公一家である大門家の面々が家庭・学校・職場などでくり広げる日常生活を描いた、きわめて家庭的な4コマ漫画である。大門家は、小学2年生のボク・ユウヤ、小学5年生の姉・アサカ、広告代理店に勤務する父親・パン、優しくおっとりした母親・キョウコの4人からなる。拾われてきた飼犬のモアもいる。彼ら以外にも、ユウヤの親友の信一や担任の先生、近所の人々、パンの同僚や上司など、さまざまな人物が登場する。「ウチの場合は」は、2001年6月に休止した「まっぴら君」（加藤芳郎）を引き継ぎ2002年1月4日号から連載を開始した。麻生の在任期間中、2009年4月10日号で連載2,000回を迎え、本論文執筆時点（2011年9月）でも2,600回を超えて継続中である。¹⁸

作者の森下裕美は、本論文が分析対象とする漫画家のなかでもっとも若く、新聞4コマ漫画以外でも広く活躍している漫画家である。1962年に奈良県で生まれた森下は、1982年に「英語教師」で第6回ヤングジャンプ青年漫画大賞に準入選し、同年、「少年」(『月刊漫画ガロ』)でデビューした。同じ年に『週刊少年ジャンプ』でも「JUN」を連載し、その後は4コマ漫画を中心に活躍するが、最近では『大阪ハムレット』(双葉社、2006～09年、2009年に映画化)や『夜、海へ還るバス』(双葉社、2008年)など、家族を主題としたストーリー漫画にも取り組むようになった。「ウチの場合は」は、作者にとってはじめての新聞連載漫画である。その他の代表作に「少年アシベ」(『週刊ヤングジャンプ』、1991年にアニメ化)、主な受賞歴として第21回日本漫画家協会賞優秀賞(1992年)、第10回文化庁メディア芸術祭優秀賞(2006年)、第11回手塚治虫文化賞短編賞(2007年)、などがある。¹⁹

麻生の在任期間中、「ウチの場合は」が首相を描くことは1度もなかったが(275本中0本)、このことは連載開始以来の作風を考えれば何ら不自然ではない。小泉も在任期間中を通じて1度も描かれておらず(1,318本中0本)、安倍がようやく1本(245本中1本=0.40%)に登場したものの、福田も皆無(280本中0本)であった。つまり、小泉政権時に連載を開始してから麻生の在任期間が終わるまでの約7年9ヵ月間で、たった1回しか首相を描いていないわけである。先行研究がくり返し指摘しているように、「ウチの場合は」は家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わない「純家庭的4コマ漫画」であり、この特徴は連載を開始した小泉政権時からいささかも変わっていない。後述するように、「コボちゃん」(『読売新聞』朝刊)と「ののちゃん」(『朝日新聞』朝刊)にも類似した特徴が見られる。

「ウチの場合は」が「純家庭的」な漫画であることは、作者の森下自身もはっきりと認めている。麻生の在任期間中、2009年4月10日号で連載2,000回を迎えた際に、森下は連載のねらいをこう説明している。「タイトルにも表れているように、よそのウチに行くとわが家とはまったく文化が違うことがありますね。読んだ人が『ウチの場合はこうだよ』と話したり、共感してもらえればうれしいです」。誰もが「共感」できるような、ごく普通の家庭内のちょっとした出来事を描いていることがわかる。本質的に政治家や政治問題とはなじまない漫画なのである。²⁰

唯一、安倍を登場させた1本にしても、「純家庭的」な漫画らしく政治的な批評性・風刺性はほとんど見られない。2007年9月22日号(No.1562)の作品(図9)がそれで、安倍の首相辞任に関する週刊誌の中吊り広告を見て若い女性が騒ぎ、男性の社員が眉をひそめる、という内容である。ここでの主題は首相や彼の辞任そのものではなく、何でも笑いの対象にしてしまう若い女性とそれを理解しかねる大人(とくに男性)という、ごくありふれた日常の出来事である。首相を登場させるといっても、前述した「アサッテ君」や本論文の後編で分析する「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊)のような「時事的4コマ漫画」とは根本的に異なる描き方をしている。

麻生を描いた作品はなかったものの、実際にあった政治家の失態を題材としていると考えられる作品が1本あったので、補足として紹介しておく。それによっても、「ウチの場合は」の「純家庭的」な性格をあらためて確認できるし、また先行研究が示した仮説を検討する材料も得られるからであ

- ・ユウヤが親友の信一に「政治のニュース関心あるんだ」と尋ねる (1コマ)
- ・信一が「もういいや」とテレビを消し、「ほんとはそんなコト言ってないとか 酒は飲んでないとかあ」「こんなオトナは嫌だなあって言うより」「将来 絶対こんな男らしくない男にはなりたくないね」と語気を強める (1～3コマ)
- ・ユウヤが、「でも ヒゲが濃いのは男らしいけど嫌だと思ふな」と答える (4コマ)

「酒は飲んでない」(2コマ)が中川の発言を示すことは、大臣辞任をめぐる上述の事実から容易に想像できる。「ほんとはそんなコト言ってない」(2コマ)が誰のどの発言をさすのかは、特徴的な手がかりを欠くため特定しにくい、中川を含め政治家が口にする無責任ないい逃れの典型例だと考えるのが自然であろう。信一はユウヤの親友の1人で、早熟で大人顔負けの博識ぶりを披露する常連の登場人物である。

「ウチの場合は」ではきわめてめずらしく、図10では登場人物が政治家をきびしく批判しているが、本論文にとって重要なのはむしろ、それでも「純家庭的」な作風を逸脱していないという点である。確かに、前半では子供の視点からの率直な政治批評・風刺が展開されている。しかし、最終的にはユウヤの発言で政治家や政治問題とはかけ離れた話題に方向転換し、「ヒゲ」(4コマ)の好き嫌いという子供らしいオチに帰着している。逆にいえば、たとえ政治家や政治問題が扱われても、「ウチの場合は」における批評・風刺の度合はこの程度にとどまるといえる。子供の言葉を借りて首相を痛烈に皮肉る手法は「地球防衛家のヒトビト」でよく採用されるが、「ウチの場合は」のほうがはるかに批評性・風刺性が薄く、かつ抽象的である。首相を1度も描いていない点とあわせ、この作品をもって「純家庭的4コマ漫画」という先行研究の分類を変更する積極的な必要性は見いだせない。

追加的に、図10で登場人物たちが話題にしている政治家が、テレビを通して間接的に見知る存在である点は看過できない。先行研究も論じているように、かつ「アサッテ君」を分析した際にも指摘したように、テレビや新聞などマス・メディアが伝える政治家を庶民が見る・語るという構図は、「ウチの場合は」に限らず他の新聞4コマ漫画にも共通して見られる独自の特徴だからである。安倍を描いた前述の図9でも、週刊誌の中吊り広告というマス・メディアの一種が作品の起点となっている。新聞4コマ漫画では、首相をはじめ政治家はマス・メディアを介して見知る「別世界」の人々として描かれることが多い。

上述の作品を含めた「ウチの場合は」についての分析・知見は、家庭漫画の首相描写に関する先行研究の仮説にも示唆を与えるが、それらは「コボちゃん」を検討する際にまとめて指摘する。なぜなら、その仮説はもう1つの「純家庭的4コマ漫画」である「コボちゃん」にも基本的に同じようにあてはまるからである。

ここでは仮説の内容を紹介するにとどめる。すなわち、「ウチの場合は」のような家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして(とくにテレビなどマス・メディアで)報道されている場合にほぼ限定さ

れる」というものである。つまり、政治家や政治問題をほとんど扱わない家庭漫画で首相が描かれるのは、マス・メディアでくり返し話題にされるなど、首相の言動がそれだけ社会全体で注視・議論されている場合に限られる、というのである。もちろん、「ウチの場合は」は首相を1度も描いていないわけであるから、首相描写に関するこの仮説を直接あてはめることはできない。しかしそれでも、首相が描かれなかった事実を含め、仮説に関して考察に値する論点はいくつか浮かんでくる。

最後に、麻生の在任期間中、作者の森下は衆議院総選挙（2009年8月30日執行）に関する4コマ漫画1本を『朝日新聞』に寄稿している。『朝日新聞』は選挙が公示された翌日の8月19日号で「笑う総選挙」という特集を組み、8人の漫画家による4コマ漫画を掲載した。森下はその1人であった。特集「笑う総選挙」については、本論文の後編の「4 結論 分析・知見の総括」であらためて言及する。

もちろん、当該作品は『毎日新聞』で連載している「ウチの場合は」とは無関係であり、本論文の分析・知見に影響を与えるものではないが、参考までに紹介しておく。というのも、選挙・政治を題材としているばかりか、本論文の分析対象紙に掲載され、かつ麻生に対する批評・風刺をほのめかす内容でもあるからである。さらに、「ウチの場合は」はただでさえ首相を描くことが少ないため、後続の研究のために比較対象となる選択肢をここで確保しておけば、将来何らかの形で役立つかもしれない。

図11がそれで、暑いなか面倒臭がりながらも投票しにきた中年女性が、麻生や鳩山由紀夫と思われる政治家を遠回しに批判する、という内容である。まず、「今のヒトはすぐブレるレイマイチだったわねえ」（2コマ）の「今のヒト」は現職の首相、つまり麻生をさすと考えられる。就任以来、麻生は定額給付金や郵政民営化をめぐる発言が「ぶれた」「矛盾している」と批判されつづけたからである。さらに、「兄弟そろって政治家でセレブのヒト」（2コマ）は、民主党の鳩山由紀夫代表とその弟で自民党の鳩山邦夫衆院議員をさしていると考えられる。2人は「兄弟そろって政治家」であり、鳩山一郎元首相をはじめ有力政治家が輩出した一族にうまれた「セレブ」といえるからである。いずれにせよ、主人公の女性は麻生にも鳩山にも否定的である。なお、民主党はこの総選挙に勝利し、鳩山由紀夫は次の首相になった。

・コボちゃん（植田まさし）『読売新聞』（朝刊）

『読売新聞』の朝刊で1982年4月から連載されている「コボちゃん」（植田まさし）は、主人公一家の日常生活を描くきわめて家庭的な4コマ漫画である。連載8,000回を機に、2004年12月1日号から全国紙の4コマ漫画としてはじめてカラー化され、2010年6月14日号では連載1万回を迎えた。本論文執筆時点（2011年9月）でも、1万4000回を超えてなお継続中である。

「コボちゃん」に登場する主要人物は、たんぼぼ幼稚園に通う5歳の主人公・コボ（田畑小穂）とその家族、会社員の父親・耕二、専業主婦の母親・早苗、祖父・山川岩男、祖母・ミネ、それに親戚の大森竹男である。飼猫のミーと犬のポチもしばしば家族の一員のように登場する。一家は東京都

Opinion

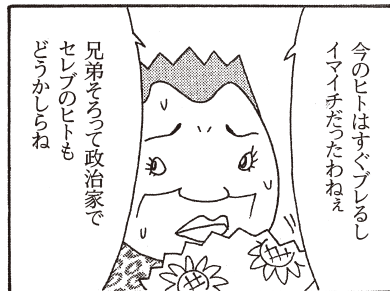
オピニオン

笑う総選挙



もりした ひるみ
森下 裕美

62年生まれ。「大阪ハムレット」で第11回手塚治虫文化賞短編賞受賞。



の私鉄沿線に居住している。「コボちゃん」は作者の幼少時代の愛称であるという。なお、コボには現在、妹・ミホ（実穂）がいるが、上述の連載1万回目の作品で誕生し、名前は公募で集まった候補のなかから作者が選んだ。したがって、麻生の在任期間中（2008年9月24日～2009年9月16日）にはまだ登場しない。また、ミホの誕生と成長にともない、連載開始当初より5歳に設定されていたコボも幼稚園を卒園することになり、2011年4月に小学1年生（6歳）となっている。もちろん、コボの小学校入学も麻生の首相辞任後の出来事である。²¹

作者の植田まさし（本名・植田正通）は、とくにサラリーマンむけの4コマ漫画を得意とする漫画家で、その活躍ぶりは「彼の作品が人気を博し、その結果として4コマ漫画専門雑誌が刊行され〔るなど〕4コマ漫画における革命児」と評されるほどである。植田は1947年に東京都世田谷区に生まれ、香川県で育った。1969年に中央大学を卒業後、1971年に「ちょんぼ君」（『週刊漫画TIMES』）でデビューした。以来、4コマ漫画を中心に執筆活動をつづけている。その他の代表作として、「かりあげクン」（『漫画アクション』など）、「フリテンくん」（『月刊まんがライフ』など）、「のんき君」（『週刊漫画TIMES』）、などがある。「コボちゃん」と「かりあげクン」はテレビアニメ化、「フリテンくん」は映画化、「のんき君」はドラマ化されている。主な受賞歴に、第28回文藝春秋漫画賞

図11 2009年8月19日号（『朝日新聞』、特集「笑う総選挙」）

(1982年)、「コボちゃん」で受賞した第28回日本漫画家協会賞優秀賞(1999年)がある。²²

作品の分析に移ると、「コボちゃん」はきわめて家庭色が強い新聞4コマ漫画で、麻生の在任期間中に首相を描いた作品は皆無(347本中0本)であった。『毎日新聞』(夕刊)の「ウチの場合は」(275本中0本)や『朝日新聞』(朝刊)の「ののちゃん」(348本中0本)と同様、政治家や政治問題とはほぼ無縁の典型的な家庭漫画であることがわかる。連載1万回を達成した際に作者を紹介した新聞記事も、「コボちゃん」を「家庭漫画」と特徴づけている。²³

首相を登場させることがほとんどないという点では、少なくとも小泉政権時から、「コボちゃん」の作風はほぼ一貫している。先行研究によれば、5年5ヵ月に及んだ在任期間中に小泉を描いた作品は1,922本中1本(0.05%)、安倍は356本中0本、そして福田も355本中1本(0.28%)で描いているにすぎない。つまり、小泉から麻生までの約8年5ヵ月間で、本論文の定義に合致する方法で首相を描いている作品はわずか2本しかないわけである。しかも、その2本とも批評性・風刺性をほとんど含まない内容である。「コボちゃん」の作品世界に首相が入り込む余地は極端に少なく、先行研究が「純家庭的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分に首肯できる。

しかし、本論文にとって同じく重要なのは、かといって政治家や政治の話題がまったくのぼらないわけではない、という点である。以下でいくつかの実例を示すが、麻生の在任期間中、登場人物たちはしばしば、選挙など社会で大きな関心を集めた政治的な問題や出来事について語りあい、さらにはそれに参加している。これは、同じく首相を描いていない家庭漫画でも「ウチの場合は」や「ののちゃん」には見られなかった特徴で、注視に値する。

それらの作品には、先行研究が示している仮説の妥当性を検討する上でも分析する価値がある。その仮説とは、「コボちゃん」など家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして(とくにテレビなどマス・メディアで)報道されている場合にほぼ限定される」というものである。麻生の在任期間中には首相を描いた作品が存在しなかったため、厳密にはそれらの作品は上の仮説の蓋然性を判断する材料にはならない。しかし、政治家や政治問題を扱っている点では仮説とまったく無関係というわけではないし、首相が1度も描かれなかったことをどう説明するかを考える上では、むしろ有用な材料となりえる。同じく首相を描いているわけではないが、政治家を批判的に取りあげている「ウチの場合は」の作品(図10)にも同様の価値を見いだすことができる。

まず、2009年5月20日号の作品(No.9621、図12)は「政治家の世襲」を扱っているが、批評性・風刺性が希薄で家庭色が強いという「コボちゃん」の作風を典型的に示している。耕二と岩男が世襲の是非について話しているが、「大きくなったらパパの会社に入るよ」(3コマ)というコボの発言で場面が切り替わり、コボが成人になるまで会社を存続させようと耕二が急に張り切りだす、というオチにつながっている。冒頭では大人2人が政治談義をしているが、それは子を思う親の愛情という作品の主題につなげるための状況設定にすぎない。政治問題を扱う場合でも、それを正面からは論じず、主題はあくまであたたかな親子関係に置いている。政治問題を題材としながらも、「コボちゃ



図12 2009年5月20日号 (No.9621)

できる。

選挙を題材とした作品は4本あったが、以下ではそのうちの2本を紹介しながら仮説との適合性や「コボちゃん」の「純家庭的」な特徴について論じる。²⁵

まず1つ、2009年7月12日号の作品 (No.9673、図13) では、掲載日の当日に実施された東京都議会選挙が題材とされている。

ん」の「純家庭的」な作風を集約的に示している作品である。

また、この作品は既述の仮説にもある程度は適合すると考えられる。なぜなら、衆議院総選挙を目前に控えたこの時期、「世襲」候補者の出馬を制限しようとする動きが民主党、つづいて自民党でも浮上し、マス・メディアでも大きく報道されていたからである。もともと、国民の代表という立場を家族・親族間で受け継ぐ世襲は、日本の政治のありようを理解する上で不可欠な要素であり、社会全体で広く認知され、かつ論争となっている問題でもある。同時期に『読売新聞』が実施した世論調査では、世襲立候補を「制限すべきだ」は48%、制限は「必要ない」は45%と賛否はほぼ等分に割れていた。補足として、元首相の吉田茂を祖父にもち、実父も衆院議員であった麻生とて、世襲とまったく無関係な政治家ではない。一般家庭で話題になるほど定着し、かつ社会を二分する時事問題であったがゆえに、普段は政治問題と無縁の「コボちゃん」でも世襲が題材になったと考えることができる。²⁴

選挙を扱った他のいくつかの作品は、上の作品以上に先行研究の仮説と親和性がある。なぜなら、麻生の在任期間中に実施された一連の選挙は、政権交代の現実性がかつてないほど高まったこともあり、マス・メディアで大々的に報道され、社会全体でとくに注目されていたからである。なかでも2009年8月30日に執行された衆議院総選挙は、1993年以来もっとも高い投票率69.28% (小選挙区) を記録し、実際に政権交代も実現している。これらの作品に首相は登場しないし、政治的な批評性・風刺性が濃いわけでもないが、基本的に政治と無縁の「コボちゃん」で選挙が扱われたこと自体は、同じ仮説で十分に説明づけることが

- ・投票を済ませた岩男が、投票所に杖を置き忘れたことに気づく（1～3コマ）
- ・「だいじょうぶ また近いうちに行きます」と冷静に応じるミネに、岩男が「ほんとに?」「ぜったい?」「占い師みたいね」と応じる（4コマ）

この時点では、総選挙の日程はまだ確定していなかった。しかし、衆議院議員の任期が同年9月10日に満了することから、近い将来に実施されることは確実であった。ミネの発言「また近いうちに行きます」（4コマ）はそのことを意味している。家庭色はさほど強くないものの、かといって政治的な批評・風刺をしているわけではなく、「コボちゃん」の「純家庭的」な作風の範囲内にとどまる作品だといえる。なお、総選挙の投開票日を8月30日とする意思を麻生が表明したのは、この作品が掲載された翌日の7月13日であった。

本論文にとって重要なのは、都議選がきたる総選挙の前哨戦として全国的に注目され、それゆえに家庭色の強い「コボちゃん」でも題材になったと考えられることである。投票率は2005年の前回は10.5ポイントも上回る54.49%に達し、これは1981年以降に実施された合計8回の都議選のなかで2番目に高い数値であった。有権者がいかにこの選挙に高い関心をもっていたかがわかる。当然、マス・メディアでも大きく報道された。首相は登場しないが、選挙が描かれたこと自体は同じ仮説で無理なく説明できる。追加的に、主人公一家が「東京都民」、つまり都議選の有権者として設定されていることも、この作品を成立させた一因であると考えられる。なお、この選挙では民主党が圧勝し都議会の第1党となり、自民・公明両党は過半数の議席を維持できなかった。この結果を受けて国政での政権交代がさらに現実味を増したことは、以下で紹介する作品につながっていると考えられる。

麻生の在任期間中にあった選挙でもっとも注目された衆議院総選挙を扱っているのが2009年8月30日号の作品（No.9720、図14）で、これにも同じ仮説をあてはめることができる。投開票日であるこの日、一家そろって投票所へむかう様子が次のように描かれている。



図13 2009年7月12日号 (No.9673)



図14 2009年8月30日号 (No.9720)

マス・メディアで大きく報道され社会的な注目を集めた話題や出来事でも、必ずしもすべての家庭漫画で描かれているわけではない。「コボちゃん」には選挙を題材とした作品が4本あったが、「ウチの場合は」では1度も取り上げられなかった。他方、「ウチの場合は」には「もうろう記者会見」で失脚した中川昭一を批判すると考えられる作品があったが、「コボちゃん」にはなかった。そして、「のちゃん」では選挙も「もうろう記者会見」も扱われなかった。もちろん、3つの家庭漫画はいずれ

・「投票にいこうかー」という岩男の一言で、皆が投票所整理券を手にする (1~2コマ)

・コボもまねをして、自分あてのダイレクトメールをもって投票に同行する (3~4コマ)

この作品の主題は、大人のまねをしたがる幼稚園児というありふれた家庭的な出来事であり、「コボちゃん」らしい作風だといえる。

しかし、図14で着目すべきは、この選挙には歴史的ともいえる本格的な政権交代の実現がかかっており、そのため主人公一家のような一般家庭でも話題にのぼり、かつそれに参加する姿が描かれるほど社会の注目を集めていた、と考えられることである。これに先立つ都議選が題材とされている (図13) ことを考えれば、国政選挙である総選挙が取り上げられるのは自然であり、首相は登場しないものの、先行研究の仮説はここでも十分に妥当性を発揮しているといえる。

ただし、先行研究が提示した仮説をめぐり、これまで指摘されてこなかった論点がいくつか浮上してくることも否定できない。いずれも本論文だけで解明できるものではなく、今後の研究課題とせざるをえないが、以下に主要な3点をあげておく。同じ「純家庭的4コマ漫画」であることから、前述した「ウチの場合は」の作品分析から得られた知見とあわせて指摘する。

第1に、同じ家庭漫画で首相を描いていない「ウチの場合は」と「のちゃん」には選挙を扱った作品が1本もなかったことを考えると、仮説で説明できるテーマの範囲には一定の制約があり、かつ漫画によっても題材とされるテーマが異なると推察できる。本論文の知見が示す限り、

も首相を描いていないため、首相を描くことに関する仮説そのものの見直しをただちに迫るわけではない。しかし、選挙や政治家の失態を扱った作品の有無が漫画によりわかれた事実にかんがみれば、同一の仮説をあらゆるテーマ・漫画に同程度にあてはめることはできないと考えるべきかもしれない。

第2に、上述の点からさらに考えをすすめれば、「コボちゃん」独自の特徴として選挙や投票と親和性・近接性がある、より一般化すれば、各漫画にはそれぞれ取りあげられやすい特定のテーマがあるのかもしれない。「コボちゃん」についていえば、政治的な行動というよりは、家庭内のごく自然な出来事、あるいは恒例行事のようなものとして選挙や投票が描かれている可能性がある。そもそも、家庭的な問題と政治的な問題の境界は、現実の世界でも厳密に分離しているわけではない。「コボちゃん」では、あるいは他の家庭漫画においても、特定のテーマをめぐっては両者が渾然一体として描かれる場合があるのかもしれない。また、同じような形で首相が登場する作品が将来あらわれることがあるかもしれない。

第3に、マス・メディアで大きく報道され社会で注目されたとしても、家庭漫画と時事漫画とでは取りあげられるテーマや問題に差があると考えられる。時事漫画である「アサッテ君」や「地球防衛家のヒトビト」ではくり返し題材とされた麻生の高級パー通いや漢字の読み間違いは、「コボちゃん」をはじめ家庭漫画では明確な形では取りあげられていない。先行研究の仮説を文字どおりに解釈すれば、そうした話題こそ家庭漫画で描かれていいはずである。にもかかわらず、実際にはそうならなかった。批評・風刺に適した問題であるがゆえに、かえって家庭漫画にはなじまなかったのかもしれない。であるならば、家庭漫画に麻生が登場しなかったこともある程度は説明がつく。もちろん、その反面で「コボちゃん」で題材となった世襲や都議選・総選挙が、「アサッテ君」や「地球防衛家のヒトビト」では少なくとも首相を描くテーマとしては扱われていない（衆議院の「解散」は複数ある）事実にも目をむける必要がある。とくに選挙は、報道機関の政治的公平性の観点から、首相を批評・風刺をする文脈では扱われにくいかもしれない。さらにいえば、総選挙では麻生自身が立候補者の1人であった事実も何らかの影響を及ぼしているかもしれない。いずれにせよ、家庭漫画と時事漫画では作品になりやすい・なりにくい事柄が異なる可能性がある。

これらの論点は、先行研究が示した仮説をより精緻化していくために、また首相の「描かれやすさ」「描かれにくさ」を決定する要因を解明するために、今後も継続的に検討すべき重要な課題である。

最後に、「コボちゃん」には総選挙で実現した「政権交代」を扱った作品が1本あるが、これは先行研究の仮説とは矛盾しないものの、ある程度の政治的な批評性・風刺性が認められる点で特異であり、言及に値する。2009年9月4日号の作品（No.9725、図15）がそれで、次のような内容である。

- ・「政権が交代して日本はどれくらい変わりますかねー」と意見を求める耕二に、岩男が「これくらいかな」と答えるが、コボと耕二はその真意を理解できない（1～3コマ）
- ・「あーさっきと腕の組みかたがかわってるー」とコボが違いを発見し、「そんなもんすか？」と耕



図15 2009年9月4日号 (No.9725)

ば、政権交代という政治現象を扱ってはいるが、それを実現させた実在の政治家や政党を描いているわけではない。特定の個人に風刺をぶつける時事漫画とはその点で根本的に異なる。同じことは、すでに分析した図13・14はもちろん、選挙を描いた残る2本の作品についてもいえる。詳しい内容紹介は割愛するが、それらの作品では政治問題のプレーヤーである具体的な個人は描かれず、「政治家」や「候補 [者]」という抽象的な匿名の人物が登場するにすぎない。この論点は、本論文の分析期間

二が尋ねる (4コマ)

前述のとおり、都議選を含め選挙を題材とした作品が4本もあることから、その所産である政権交代が取りあげられること自体は不自然でない。しかし、「コボちゃん」ではきわめてめずらしく、政権交代をしても大きな変化は望めない、という政治風刺を読みとることができる。

この作品は、「コボちゃん」の首相描写の分析を深める上で参考になりえる重要な論点を、少なくとも2つ含んでいる。それらは、既述した先行研究の仮説をめぐる3つの論点とあわせて、追加的な事例と比較検討をかさねることで継続的に考察していくべき研究課題である。

第1に、政権交代のような例外的に重大な政治現象が生じた場合には、家庭漫画の作風を逸脱せぬ範囲で、かつ単発的に、「コボちゃん」でも政治的な批評性・風刺性が発揮される場合があるのかもしれない。確かに、図15で見られる政治風刺は抽象的であるし、首相をはじめ特定の政治家を描いているわけでもない。しかし、登場人物が具体的な政治問題について批判的な見解を示唆している事実は、政権交代のような歴史的といえる政変が起きた場合などでは、「コボちゃん」にもある程度の批評性・風刺性が加わる可能性を示唆する。今後、似たようなケースで首相が登場する作品が描かれるのかどうか、注視していく必要がある。

第2に、とくに重大な影響を及ぼす政治現象が生起し、それが作品の題材となる場合でも、「コボちゃん」では特定の政治家個人ではなく、あくまで一般的な出来事としての「政治現象」や抽象化もしくは象徴化された「政治家」が描かれるにとどまる、と考えられる。図15を例にとれば、

中に首相が1度も描かれなかったことを説明する上でも参考になるかもしれない。²⁶

- 11 作者自身や漫画の登場人物については、内藤麻里子「朝刊4コマ漫画『アサッテ君』おめでとう、きょう1万回」『毎日新聞』2003年11月5日、内藤麻里子「読書日和 東海林さだおさん みみっく、まじめで大胆なショージ節」『毎日新聞』2011年6月7日夕刊、などが参考になる。
- 12 東海林の生い立ちや漫画家としての経歴については、東海林さだお『東海林さだお自選 なんたって「ショージ君」 東海林さだお入門』（文春文庫、2003年）などが参考になる。
- 13 麻生を描いた8本は、以下の号に掲載されている。2008年11月7日号（No.11693）、2008年11月16日号（No.11701）、2008年11月20日号（No.11705）、2008年11月27日号（No.11712）、2009年2月8日号（No.11783）、2009年4月23日号（No.11855）、2009年6月20日号（No.11911）、2009年7月7日号（No.11928）。なお、本論文の前編では「アサッテ君」が麻生を描いた頻度を「2.39%」としたが、小数点以下3桁の切り捨てで全体を統一することとし、「2.38%」に訂正する。ただし、本数の「335本中8本」は変わらない。
- 14 「鳩山更迭の後、寿司屋貸し切りで上キゲン！ 余命1ヶ月の麻生首相」『週刊文春』2009年6月25日号。なお、見出しにある「余命1ヶ月」の部分は、2009年5月に公開され話題となっていた映画「余命1ヶ月の花嫁」（原作はTBSイブニング・ファイブ編『余命1ヶ月の花嫁』[マガジンハウス、2007年]）を意識してつけられたものと考えられる。
- 15 パターン3で漢字の誤読を扱ったもう1本は2009年4月23日号（No.11855）の作品で、『週刊新潮』の「誤報」（朝日新聞阪神支局襲撃事件の「実行犯」に関する一連の報道）と関連させて首相を登場させている。本論文の定義には合致しないが、同じく誤読問題を題材としている作品として、2008年11月24日号（No.11709）、2008年12月1日号（No.11716）、2008年12月19日号（No.11733）、がある。
- 16 題材は異なるが、また「首相を描いている」作品ではないが、庶民の視点から首相の高慢さを批判する視座は2008年11月30日号（No.11715）の作品にもはっきりと見てとれる。そこでは、急いで食事をする昼吉が、その理由を尋ねる夕子に「たらたら飲んで食べて何もしないなんていわれたくないからね」と答えている。麻生は同年11月20日の経済財政諮問会議で、「たらたら飲んで、食べて、何もしない人【患者】の分の金【医療費】を何で私が払うんだ」とのべ、批判を受けていた。
- 17 首相就任以前に安倍・福田を描いた作品は2本ある。まず、2006年5月29日号（No.10878）の作品は、自民党の次期総裁候補者として安倍と福田を登場させ、両候補者の一本化という政治問題を、春男の昼食の一本化（そばとカレーのセットを注文）になぞらえている。もう1本、2006年9月25日号（No.10977）の作品もたわいのないオチを特徴とし、安倍の著書『美しい国へ』（文春新書、2006年）をヒントに、ラーメン店主がのれんを「美しいラーメンへ」に書き換えるという内容である。安倍が首相に就任したのは、この作品が掲載された翌日の2006年9月26日である。
- 18 作者自身や漫画の登場人物については、五十嵐英美「夕刊で好評連載『ウチの場合は』『大門さんち』を語る森下さん」『毎日新聞』2002年2月22日夕刊、「夕刊連載4コママンガ『ウチの場合は』こんな人たちが大活躍」『毎日新聞』2003年6月24日夕刊、「森下裕美さん 4コマ漫画『ウチの場合は』2000回超え創作の舞台裏」『毎日新聞』2009年4月15日夕刊、などが参考になる。
- 19 森下の最近の活動については、内藤麻里子「森下裕美さんが新作漫画『夜、海へ還るバス』」『毎日新聞』2008年6月11日夕刊が参考になる。
- 20 内藤麻里子「『ウチの場合は』2000回」『毎日新聞』2009年4月10日夕刊。
- 21 作者自身や漫画の登場人物については、「コボちゃん1000回」『読売新聞』2010年6月14日、「コボちゃん妹『ミホ』ちゃんに」『読売新聞』2010年6月16日、佐藤憲一「気になる！ コボちゃん来年は小学生」『読売新聞』2010年12月15日、「コボちゃん入学記念 ご両家夢の共演 *植田さん・けらさん対談」『読売新聞』2011年4月6日、などが参考になる。
- 22 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、12。
- 23 「笑みコボれる28年」『読売新聞』2010年6月14日。
- 24 「『世襲候補』意見割れる」『読売新聞』2009年5月14日。
- 25 割愛した別の2本は、2009年8月19日号（No.9709）と同年8月31日号（No.9721）の作品である。前者は大音量で「衆議院議員候補 ○野△男でございます！！」と連呼する宣伝車を、後者は日焼けしているためゴルフ愛好者と間違えられる落選候補者を描いている。

- 26 注25でのべたように、選挙を題材とした2009年8月19日号 (No.9709) と同年8月31日号 (No.9721) の作品は、それぞれ「○野△男」という非実在の候補者と、同じく特定できない落選候補者を描いている。

【Abstract】

Prime Minister Taro Aso in Newspaper Comic Strips (Part 2): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2008-2009

Takeya Mizuno, Tomomi Fukuda, Juri Kinomura, Toshiyuki Shiga,
Omoi Sugawara, and Kazuki Chida

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Taro Aso during his tenure, from September 24, 2008 to September 16, 2009.

As the second installment of a three-part series, this article (Part 2) analyzes qualitatively how *Mainichi's* "Asatte Kun" (Mr. Day-after-Tomorrow), "Uchi no Baai ha" (In Case of our Family), and *Yomiuri's* "Kobo Chan" (Kobo, the Li'l Rascal) depicted Prime Minister Aso.